



2008年4月4日

報道関係者各位

株式会社キャピタル・アイ

キャピタル・アイがBEST DEALS OF 2007 を選出： M&A時代の資本市場を反映

キャピタル・アイニュースは4日、キャピタル・アイ Awards“BEST DEALS OF 2007”と“BEST ISSUERS OF 2007”を発表した。引受証券会社と機関投資家へのアンケートをもとに編集部審査を加え、2007年度の債券・株式発行市場における優良案件・発行体を選出した。

M&A が活発になってきた時流を反映して、普通社債部門の麒麟ホールディングス、日本たばこ産業(JT)、HOYA、既公開株式部門のダイキン工業がいずれも買収資金に関わるファイナンスで、サッポロホールディングス債は、社債の発行者が買収された際に投資家を保護する条項を備えていた。

2007年度は株式市場・債券市場ともにサブプライムローン問題によって乱高下したが、麒麟HDやJTの普通社債、ソニーフィナンシャルホールディングスのIPOなど、不安定な環境のなかでも投資家が求める価格を探って大型のファイナンスを成功させた案件の評価が高い。

以下が授賞リスト(<>内は主幹事、日付は条件決定日/決議日)。

普通社債部門

BEST DEALS OF 2007

第1回麒麟ホールディングス債 <三菱UFJ/日興シティグループ>	3月12日	5年	800億円
第2回麒麟ホールディングス債 <三菱UFJ>	3月12日	7年	300億円
第3回麒麟ホールディングス債 <三菱UFJ/日興シティグループ/野村>	3月12日	10年	700億円
第4回麒麟ホールディングス債 <三菱UFJ/大和SMBC/UBS>	3月12日	12年	200億円

史上2番目の大型起債。信用リスク不安によって悪化した市場環境であったが、格付けや知名度の高さ、買収資金の借り換えという明確な資金用途によって成功に導かれた案件。投資家からも適正なスプレッドと評価された。

BEST DEALS OF 2007 2 位

第 2 回日本たばこ産業債	7 月 18 日	3 年	500 億円
第 3 回日本たばこ産業債	7 月 18 日	4 年	400 億円
第 4 回日本たばこ産業債	7 月 18 日	5 年	600 億円

〈野村／大和SMBC〉

日本企業による過去最大の M&A であった英ギアラハー社買収資金のリファイナンス案件。約 8 年ぶりの起債だった。需要動向を配慮し各年限の発行額の設定に柔軟に対応するなど、投資家との対話を重視した結果、総額 1500 億円の消化が円滑に進んだ。

BEST DEALS OF 2007 3 位

第 1 回HOYA債	9 月 5 日	5 年	400 億円
第 2 回HOYA債	9 月 5 日	7 年	250 億円
第 3 回HOYA債	9 月 5 日	10 年	350 億円

〈三菱UFJ〉

ペンタックス買収資金の調達という明確な資金使途と初回債であったことから人気化した。1 日で 4000 億円を超える起債集中日に総額 1000 億円のディールを成功させている。IR 活動や早めの主幹事アナウンス、適切なレンジ設定など資本市場に対する真摯な姿勢が評価された。

特別賞

第 1 回コバレントマテリアル債	2 月 8 日	5 年	550 億円
------------------	---------	-----	--------

〈みずほ／ゴールドマン・サックス〉

未上場会社のデビュー債であり、LBO 後のリファイナンスという点で注目度が高かった。事前の IR で発行体のビジネスモデルの浸透を図り、クレジット市場が悪化しているなかトリプル B 格の 1 回号あたりとしては年度最大の起債を成功させた。当初 300 億円の予定が 550 億円に増額されている。

特別賞

第 22 回サッポロホールディングス債	6 月 21 日	4 年	100 億円
---------------------	----------	-----	--------

〈みずほ／日興シティグループ〉

第 23 回サッポロホールディングス債	6 月 21 日	6 年	100 億円
---------------------	----------	-----	--------

〈みずほ／野村〉

本邦 SB で初めて発行体の買収に関わる期限前償還(チェンジ・オブ・コントロール)条項を付けた案件。LBO などのリスクに対し、債権者保護に取り組んだ功績は大きい。

BEST ISSUER OF 2007

東京電力

起債環境の悪化と原発トラブルによる影響を考慮し第 530 回債よりスプレッドプライシングを採用。それまでの“東電方式”と決別することで起債運営の透明性と発行体に対する信頼度が向上。2007 年度の発行額は 7500 億円と国内最大。

財投機関債部門

BEST DEALS OF 2007

第4回住宅金融支援機構債	8月9日	5年	93億円
第5回住宅金融支援機構債	8月9日	10年	333億円
第6回住宅金融支援機構債	8月9日	20年	130億円

〈みずほ／野村〉

サブプライムローン問題でクレジット市場が崩れるなか、ワイドニングを反映したスプレッドを提示することで大幅な超過需要を生み、市場に安心感を与えてセンチメントを回復させた。10年債は、同じ年限に続く電力債のプライシングに好影響を及ぼした。

BEST ISSUER OF 2007

公営企業金融公庫

2008年10月からの地方公営企業等金融機構への組織改編に備えて“政府保証債から財投機関債へ”のコンセプトを打ち出し、マーケット環境を踏まえた起債に心がけ投資家からの信頼を得た。初の5年債や、政保債からの代替債を供給するなどの試みも評価された。

地方債・地方公社債部門

BEST DEAL OF 2007

平成19年度第3回横浜市債	8月29日	10年	300億円
---------------	-------	-----	-------

〈幹事：三菱UFJ／大和SMBC〉

BEST ISSUER OF 2007

横浜市

19年度第3回債は、サブプライムローン問題によって市場が混乱した8月下旬の起債だったにも関わらず、市場実勢に則した発行条件を示して順調に販売。9月債の先導役となり、後続の範となった。この起債の増額の際に初めて活用されたフレックス枠を設けるなどの前衛的な取り組みや、全ての年限にわたって実勢重視のプライシングを継続し、WEBサイト上で英語版のIRページを公開するなど、マーケットに向かう姿勢が評価されて地方債部門の発行体としても受賞した。

サムライ債部門

BEST DEALS OF 2007

第1回オーストラリア・ニュージーランド銀行債	3月5日	5年	270億円
第2回オーストラリア・ニュージーランド銀行債	3月5日	3年	371億円
変動第1回オーストラリア・ニュージーランド銀行債	3月5日	5年	717億円

〈大和SMBC／みずほ／日興シティグループ〉

“サブプライム無縁”にも関わらず丁寧なIRや起債運営を行い、「旨みのあるスプレッド」を提供。初物ながらも豪銀ネームとして最大となる総額1358億円の起債を成功させ、早くもサムライ債市場の“顔”になりつつある。

BEST ISSUER OF 2007

ゼネラル・エレクトリック・キャピタル・コーポレーション

米国の振替外債として初となる現物交換債のスキームを導入し、米国籍の発行体がサムライ債市場で資金調達するうえでの問題を解消した。また、“6A”と最高位の格付けを有し、「常に適正水準で起債するネーム」として高く評価されている。

証券化部門

BEST DEAL OF 2007

オリオントラスト1 信託受益権 6月11日 34年 152億4873万6000円
〈野村〉

住宅金融支援機構のRMBSを裏付けとした日本初のCMO。年限の組み換えによって、機構債の投資家層拡大に寄与した。情報ベンダーに信託契約書などを開示し、市場関係者が参加可能な環境を提供した意義も大きい。

特別賞

第1回財政融資マスタートラスト特定目的会社 2月22日 10年 1000億円
〈大和SMBC／三菱UFJ／日興シティグループ〉

国が証券化市場へデビューした案件。国の資産圧縮手段として意義があり、2007年度で最も注目度が高かった案件と言える。一般債市場の商品として市民権を得るため10年プレットの公募社債の形式を採り、事前にラージミーティングを実施するなど、今後の定着に向けた努力が見られた。

外債部門

BEST DEAL OF 2007

東京都ユーロ建て債 1月17日 27年 3億1800万ユーロ
〈メルリリンチ／野村／ドイツ〉

投資家の要望に応じて本邦の地方自治体による外債として初めて格付けを取得。欧州における2回のIR実施で幅広い層から支持を得て、新たな投資家も獲得した。非居住者への源泉税非課税措置の開始直後という好タイミングでの起債でもあった。

BEST ISSUER OF 2007

日本政策投資銀行

財投機関による本邦初の政府保証を付さない外債を発行し、資金調達の選択肢を広げたことは意義深い。グローバル・ユーロ建て債も発行しており、民営化を控えて調達手段の多様化に努めている。

新規公開株式 公募・売出部門

BEST DEAL OF 2007

ソニーフィナンシャルホールディングス 9月4日 公募・売出：80万株 3200億円
〈野村／JPモルガン〉

BEST ISSUER OF 2007

ソニーフィナンシャルホールディングス

公募・売出は、総額 3200 億円という 2007 年度最大の IPO。生損保、銀行の持ち株会社として初の上場を果たした。サブプライムローン問題によって不安要素の多い金融セクターで、抜群のネームバリューと適切なプライシングで幅広い投資家層の呼び込みに成功し、上場から今日に至るまで堅調な株価を維持。低迷が続く IPO 市場で救世主的役割を果たした。個人投資家が IPO に参加する意欲の回復に一役買い、上場企業の少ない生保業界に先鞭をつけた功績も大きい。上場に先立ち約 150 件の機関投資家を訪問。会社の強みを粘り強く訴えたばかりでなく、マーケットを盛り上げようとした姿勢が評価され、発行体としても受賞した。

BEST DEAL OF 2007 2 位

セブン銀行 1月22日 売出：36万3750株 509億2500万円
〈野村／日興シティグループ／モルガン・スタンレー〉

ソニーFHDに次ぐ 2007 年度 2 番目の大型案件。ATM に特化した独自のビジネスモデルと親会社の知名度、緻密な IR 活動がうまく機能し、上場後は株価、出来高とも堅調に推移している。市場が一段と冷え込む中で、適切な公開価格によって着実に需要を集めたことが高評価につながった。

特別賞

ユビキタス 10月9日 公募・売出：8266株 8億2660万円
〈野村〉

ジャスダック新市場 (NEO) の第 1 号案件として上場を成功させたことが高く評価された。先進性のある技術を保有していることや、ゲームソフト向けという分かりやすいビジネスモデルが個人投資家層を引き付けている。上場後の株価も公開価格を大幅に上回っており、NEO 市場の今後の発展に弾みをつけた。

特別賞

チャイナ・ポーター・エンバイロメンタル・ソリューションズ・テクノロジー
〈大和SMBC〉 7月4日 公募・売出：12万株 192億円

中国本土企業初の東証 1 部上場として注目を集め、その重責を見事に果たした。環境銘柄という話題性だけでなく、中国企業を日本の技術力で支援し、日本市場で資金調達を行うというビジネスモデルが好感された。今後の海外案件の呼び水となることが期待されている。

既公開株式 公募・売出部門

BEST DEAL OF 2007

ダイキン工業
〈野村〉

5月31日 公募：2550万株 1034億5350万円

BEST ISSUER OF 2007

ダイキン工業

調達目的がマレーシアの大手空調企業の買収資金返済というエクイティ・ストーリーの明確さが、「買収ファイナンスの模範例」と評価された。調達額が年度最大規模の1035億円ではあるが、新株の発行数を発行済み株式の10%に抑えるなど既存株主への配慮が見られた。12期連続(1996年3月期～2007年3月期)で増益(経常利益ベース)を果たしている優良企業であること、M&Aによる効果と市場環境を鑑み買収から4カ月の期間を置いた点などから発行体としても評価された。

新規公開株式／既公開株式部門

BEST ISSUER OF 2007

エヌ・ピー・シー

2007年6月にIPO、8月に株式分割、2008年2月にPOを実施。好業績と太陽電池の需要拡大を背景に積極的な資金調達を展開。設備投資と研究開発という明確な資金使途が投資家に好感されている。株価は分割後も好調に推移し、2007年度屈指の好パフォーマンスを見せた。

不動産投資信託証券 発行部門

BEST DEAL OF 2007

日本ビルファンド投資法人
〈野村〉

1月16日 追加発行：3万1800口 383億3172万円

BEST ISSUER OF 2007

日本ビルファンド投資法人

上場を予定していた2本のJ-REITが昨年12月に中止となるなど、環境が悪化したなかでのオフリングだったが、順調に需要を集め、その後の投資口価格も堅調に推移した。地合いの悪い流れを断ち切り、高いパフォーマンスを見せたことは、J-REIT市場の回復のきっかけとなり、後続のオフリングにもつながった。メンスポンサーが三井不動産であり、同社との連携により取得した物件で収益力も安定しているほか、5回目となる1月の追加発行を含めてこれまで発行価格を下回ったことがないことなどからBEST ISSUERも受賞した。

転換社債型新株予約権付社債部門

BEST DEALS OF 2007

ヤマダ電機 ユーロ円 CB	2月26日	5年	700億円
ヤマダ電機 ユーロ円 CB 〈野村インター〉	2月26日	7年	800億円

BEST ISSUER OF 2007

ヤマダ電機

リキャップCBを本邦企業で初めて採用。CBで調達した資金を自己株式の購入に充て、1株当たり利益を高めつつ資本効率の改善につなげる試みが、既存株主や投資家に配慮したスキームとして評価された。発行体は、強固な財務体質を強みに積極的に店舗網を拡大しており、内需関連株では数少ない成長企業。明確なエクイティ・ストーリーに対する投資家からの評価が高くBEST ISSUERも獲得した。

■キャピタル・アイ Awards とは:

当年度の資本市場でなされたファイナンスのなかで最も優れた案件は何か、発行体は誰か、普通社債、財投機関債、地方債、サムライ債、外債(日本企業による海外発行債)、証券化、新規公開株式、既公開株式、不動産投資信託証券(J-REIT)、転換社債型新株予約権付社債(CB)の各部門にわたって引受証券会社と機関投資家へアンケートを実施。回答をもとに、市場に円滑に受け入れられたか、市場にとって意義があったか、市場の発展や活性化に資するかなどの観点で編集部が選出し、表彰する。

◆株式会社キャピタル・アイについて

代表者:代表取締役 高田 一子

所在地:東京都千代田区西神田 3-1-6 日本弘道会ビル7階

設立:2006年7月

資本金:8千万円(2007年11月30日現在)

主な事業の内容:金融市場に関するオンライン情報サービス

金融専門誌や関連書籍の製作・発行

【債券・株式資本市場のプロフェッショナル向けリアルタイム情報サービス「キャピタルアイ・ニュース」を提供しています。債券分野では普通社債、財投機関債、政府保証債など債券発行市場を幅広くカバーし、セカンダリー市場やCDS市場などのニュースも配信しています。株式分野では株式、不動産投資信託証券、転換社債型新株予約権付社債のほか、M&A関連や貸株の市場動向などを報道しています。】

ホームページ:<http://news.c-eye.ne.jp/info/>

【本件に関するお問い合わせ先】

株式会社キャピタル・アイ

広報担当:桜井由佳 03-6826-4710